

## 〔研究ノート〕

# アカデミックリテラシー授業報告2015

## The Report on “Academic Literacy” 2015

中村学園大学 流通科学部

福 沢 健・音 成 陽 子・木 下 和 也・池 田 祐 子  
飼 牛 万 里・近 江 貴 治・朴 晟 材・大 川 洋 史

### 1. はじめに

中村学園大学では、平成26年度のカリキュラムの改訂に伴い、「アカデミックリテラシー」という科目を新設した。「アカデミックリテラシー」は1年前期に必修科目として置くもので、流通科学部に入学した新1年生を対象とする初年次教育科目として、大きな役割が期待されている。その教育目標は次の通りである。

- ①高校生活から大学生活へ順調に移行するための心構えを知り、新しい仲間との親睦を図る。
- ②高校時代の受動的な学習ではなく、大学では興味を持った分野を自ら追求する能動的な学習が必要なことを実体験し、それに必要なスキルを身につける。
- ③流通科学部のカリキュラムに対する理解を深め、そのために今何をやるべきかを考える。

従来、中村学園大学流通科学部においては、初年次教育科目として「入門演習」があった。しかし、「入門演習」は、担当者が流動的であったということもあり、プログラムの内容がなかなか固定化しないという問題点があった。これに対して、「アカデミックリテラシー」では担当者がある程度固定化し、継続的に取り組んでいく体制とした。本稿は、新体制における二年目の取り組みを記録・報告を、次年度以降の中村学園大学流通科学部の初年次教育の向上のた

めの参考として残しておくことを目的とするものである。

### 2. 授業概要及び授業計画

まず、「アカデミックリテラシー」の授業概要及び、授業計画（15回）を示す。

授業は、①小教室での各指導主任による教室単位の講義及び演習と、②大教室での講師による全体講義及び③授業時間外の図書館ツアーからなる。①は、各クラス単位での指導主任による自由な講習を行うが、数名のグループ単位でテーマを決め、自ら調査し、互いに報告しあい、意見を交換し、レポートにまとめるというグループ学習と、講義をノートにまとめ、新聞や書籍等から補足情報を収集する各人の個人学習を通じて、大学でのスタディ・スキルを習得する。②は、履修やTOEIC試験、海外研修についての講義を行う。③は、1回だけ別途時間を指定し、30名単位での図書館ツアーを行い、図書館の利用方法を学ぶというものである。

各回の授業計画は、以下の通りである。

- 第1回 履修指導 ①（大教室）コース制・ガイドブックの説明 ②（小教室）各指導主任による相談 ③入学前教育（英語、SPI）の回収
- 第2回 （小教室） プレイメントテスト

の実施

●第3回 図書館ツアー（担当：図書館） 8回に分けて行うため、実施時期はクラスにより異なる。

●第4回～第11回（小教室） テーマ授業（1）～（8） ①各指導主任がテーマを決め、クラスごとに講義を行う。②テーマに基づいた課題を行い、レポートを作成する。

●第12回（大教室） ①TOEIC 試験の説明と海外研修の紹介。②海外スカラシップ制度の紹介。

●第13回～第14回（小教室） グループ学習（1）～（2） 各指導主任が定めたテーマに基づき、調査・発表・レポート作成を行う。

●第15回（大教室） 今後の履修に向けてコース選択希望調査を行う。

まず、全体のプログラムとしては、第1回の履修指導、第2回のプレイズメントテスト、第3回の図書館ツアー、第12回の①TOEIC 試験の説明と海外研修の紹介。②海外スカラシップ制度の紹介、第15回のコース選択の説明及び希望調査がある。まず、プレイズメントテストについて述べる。プレイズメントテストは、高校までの基礎的学力を問う試験で、英・数・国で実施した。この点数の低かった学生については、昨年度と同様、基礎教育センターにおいて、補講を受けることを義務づけた。プレイズメントテストの成績と一学年における成績、補講の実施の効果、などについては、別途に報告する。

その他「アカデミックリテラシー」の特色として挙げられるのは、第4回～第11回に実施したテーマ授業（1）～（8）である。各指導主任は、1時間ずつ順番にローテーションを組んで、それぞれテーマの授業を各クラスで順番に行っていく。そして、そこでテーマに基づいた課題を行い、そのレポートの作成を学生に課す。したがって、各教員は、テーマ授業を各クラスに対して八回繰り返すことになる。また、第3

回のところで予定している図書館ツアーに関しては、全学年が一度に行うことができないので、テーマ授業と共に各クラスで順番に行っていく。さらに、各教員が指導主任を担当するクラスに対しては、ローテーションで行ったテーマ授業の他に、第13回～第14回にそれぞれ独自のグループ学習（1）（2）を行った。この内容は各教員に任せしたが、テーマ授業をより深化させるために、二回の授業時間を配当した。テーマ授業・図書館ツアー・グループ授業のローテーション表は次頁に示した。

また、評価方法は、①テーマ授業に関するレポートの内容、②グループ学習報告と最終レポートの内容、③出席状況及び積極性等を総合的に勘案することとした。テーマ授業の内容を各10点として、各教員に採点してもらい（計70点）、クラス単位のグループ学習の点数を30点として。それに加えた。そこに、出席状況及び積極性等によって加点・減点を加えた。特に、プレイズメント試験において、低得点だった学生に対しては、基礎教育センターにおける補講を必修として、その出欠を点数に反映させた。

#### 【テーマ授業の例】

●福沢健 吉見俊哉「ディズニーランド」を読む

大学の勉強の意味と、必要な技能（読解力・要約力・思考力）とを考えてもらうために、「ディズニーランド」を例にとりてワークショップを行った。

東京ディズニーランドの地図、北九州スペースワールドの地図を配布して、両者の違いをグループごとに討論して、発表させた。

次に、吉見俊哉「ディズニーランド」を読ませて内容を要約させ、そこで、自分たちが漠然と考えていたディズニーランドの特徴は、「インターラクティブ性」「三次元のアニメーション」という明確なコンセプトに基づいて作られたものであることを認識させた。ここで、大学

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
			4/9	4/16	4/23	4/30	5/7	5/14	5/21	5/28	6/4	6/11	6/18	6/25	7/2	7/9	7/16
クラス	指導主任	教室	合同	合同	テーマ授業・グループ演習・図書館ツアー (クラス)									合同	グループ 演習 (クラス)		合同
1a	A		ガイダンス (大教室)	プレースメントテスト (各クラスの教室)	A	A (図)	C	D	E	F	G	H	B	スカラシップなど (大教室)	A	A	コース選択など (大教室)
1b	B				B	D (図)	E	F	G	H	A	C	B		B		
2a	C				C	E	F	C (図)	G	H	A	B	D		C	C	
2b	D				D	F	G	H	D (図)	A	B	C	E		D	D	
3a	E				E	G	H	A	B	E (図)	C	D	F		E	E	
3b	F				F	H	A	B	C	D	F (図)	E	G		F	F	
4a	G				G	B	D	F	H	C	E	G (図)	A		G	G	
4b	H				H	C	E	G	A	B	D	F	H (図)		H	H	

の勉強とは、理解できないような難しい理論を覚えるものではなく、自分たちが漠然と感じていたもの、感覚的に捉えているものについて、論理的に説明するものであることを強調した。また、ディズニーランドの特徴については、他の立場からもさまざまに説明されていることを述べたうえで、大学の勉強とは一つの結論を覚えるものではないということも述べた。

レポートは、吉見の論文を踏まえて、ディズニーランドと他のテーマパークとの違いをまとめさせた。

●音成陽子 日常生活の中の健康チェック  
内容

1. 脈拍数をはかろう
  - 1) 脈拍数 (自分、友達)
  - 2) 脈拍からわかる健康状態

- (1) 脈拍のはかり方
- (2) 不整脈 (期外収縮) とは
  - ・頻脈、徐脈、その他の症状
- 3) 脈拍計を使って (階段、速歩などの脈拍の変化)
2. 血圧をはかろう
  - 1) 血圧計を使って
  - 2) 血圧からわかる健康状態
3. この模型は何か
  - ・見た目、色、触感、重さ
4. その他、日常生活でできる健康チェックを考える (課題)

●木下和也 ビジネスと予測手法  
前年度と同じく「ビジネスと予測手法」という題材で、過去のデータから将来の需要を予測することができることをテーマに授業を進めた。

ただし、内容は数学的なものではなく、他人に納得してもらい計算過程の説明をどのように記述すべきかを中心に進めた。いわば、「計算問題」であっても、試験やレポートでは読む側の立場を考えて、「正しい日本語で、相手が納得できるように」記述しなければならないことを説明した。

数学が苦手であることは予想していたとおりであるが、数字を扱うことが、ビジネスや将来の仕事に関係あると考えている学生は少ないように感じた。しかし前年度と異なり、内容について興味を持って質問したり、感想を言いに来たりする学生が少なからずいた点は注目に値する。

ただし、学ぶ目的を説明して模範解答を示したにもかかわらず、きれいに計算過程を説明しながら書く習慣ができていないという点は、前年度の1年生と同じであった。基礎学力同様に、答案の記述方法やレポートの書き方についても指導を受ける必要がある学生は、毎年多く存在し、この点に留意して1年生への指導を行わなければならないと感じている。

そのほか、全般的に気づいた点はプレースメントテストのスコア（偏差値）は学習態度や意欲、そのほかの科目の成績にある程度相関があるということであり、この点は前年度と同様である。またクラスによりプレースメントテストの成績が偏って分布しており、クラス間には学力の格差がある。後期の必修科目で筆者が感じたことは、学力のクラス間格差はその後もクラスの雰囲気などに少なからず影響しているということであり、今後入学時のクラス編成において何らかの対処が必要であると感じている。

#### ●池田祐子

「英文学」というテーマで、散文詩や歌を題材に英文を読む体験をさせた。大学ではゼミで英語の文献を読む場合もある。昨今、大学生に求められる能力として英語が重視されているこ

ともあり、英文の読み方や鑑賞の仕方、その面白さについて触れてほしいと考えた。

流通科学部には、高校まで英語による授業で日常英会話を中心に学んできた学生が多い。そのため、検定試験に必要な基礎文法や長文読解を苦手としていることは、TOEICのリスニング・セクションとリーディング・セクションのスコア分布から明らかである。

テーマ授業では、大学生が興味をもつような題材を選び、英語もエンターテイメントであるという意識で取り組める題材を選んだ。散文詩は単語数178で最後には「オチ」があり、英文学らしい皮肉の利いた小作品である。最後まで独力で読み切りオチが分かって感心する学生もいれば、第一文から指導をしなければ手も足も出ない学生もおり、入学時点の語学力の差が顕著に現れた。

歌は流行中のディズニー映画から抜粋し、よく知られている日本語の歌詞とオリジナルの英語の歌詞がどれだけ違うのかを実感してもらった。そこにアメリカと日本の視点の違い、国民性の違いが表れていることを学習した。

英語を学ぶことは他国の文化を知ることであり、その新しい知識の習得を面白いと感じられるかが鍵である。そのことを、大学での学びの導入にあたるアカデミック・リテラシーで分かりやすい形で提示できるよう、来年度にむけて一層の改善を図りたい。

#### ●飼牛万里 テーマ：「英語学習の意義について」

大学に入学する学生には、それまでに英語に対する関心を失っている者が多く見受けられる。こうした現状を踏まえ、学校教育の最終段階にある大学での英語教育を有効に進め、さらには国際化された社会に貢献できる人間を育成するためには、何よりもまず英語学習の意義を認識させ、十分な動機づけを行うことが不可欠である。本講義では、英語に対する興味を喚起し、

英語学習への意欲を高め、国際的視野の拡充を目標に、テーマを設定した。それを、身近な具体例を示しながら分かりやすく説明した。

講義内容：

1. 英語はあくまでも「言語」であり、「教科」ではない。日本語と同じく日々の生活に使用される、生きた「言語」である。たまたま学校で学習するため、「教科」となっているが、元来法則や試験、成績、点数のために存在しているものではない。
2. 英語は現代社会において、「地球語」である。70億近くの人々が暮らし、数千語が存在する地球上において、多くの人々を結び相互理解を可能にしている言語である。  
母語を大切にしながら、同時に地球人として、人類共通語である英語を身につけることは必須である。自分に関係のないものでは決してない。
3. 我々は直接的にも、間接的にも英語に触れ、英語の恩恵を被って生活が成り立っている。一例をとれば、日常生活で食する食品や食料、原料の多くは輸入されているが、その背景には必ずと言ってよいほど英語での様々なやり取りがあり、そのおかげで、世界各地域から我々の食卓に必要な食べ物が届いている。英語は生きてゆくために必要なものであると言っても過言ではない。
4. 英語は教科として学校での学習で終了するのではなく、卒業し社会に出てからこそ必要になるものである。企業でも英語力が求められる。学生時代は、将来に生かすべく英語の実践力を培う準備段階である。
5. 英語を知ることによって、世界の人々とつながり理解することで自らの世界を広げ、多角的視点を持つことができる。人生を豊かにすることができる。

講義後、考察レポートを書かせたが、多くの学生が「地球語」という言葉に心を動かされたようである。英語の重要性、必要性を身近に実感、再認識し、今後積極的に勉強したいという意欲が示され、前向きに学習に取り組もうとする姿勢が見られた。英語が世界の国と国、文化と文化、人と人をつなぐ「言語」であるという視点が学生たちにとって新鮮で、胸中に強く印象づけられた結果となり、所期の目的が達成された感がある。

#### ●近江貴治 統計から探っていこう

日常生活で使用している様々なモノについて、それらがどこから運ばれて自分の手元にたどり着いているのかを意識することは少ないだろう、ということの切り口に、まず、福岡県に運ばれて来るモノ、運び出されるモノは、どこから（どこへ）が最も多いか、上位3位までの都道府県を、総量およびいくつかの品目別に記入させ、答え合わせを行い、自身の感覚と統計情報とのギャップを体感させた。次に、貨物地域流動調査の都道府県別 OD 表を配布し、いくつかの課題を与えて数字を探し出す作業を行った。

その後、大学での研究は客観的な情報に基づかなければならないこと、そのひとつとして統計に触れる機会をこれから増やしてほしいこと、および日本は統計大国であるので自分の関心ある分野からでも一次統計に触れてほしいことを講義した。

加えて、どのようにつくられた数字なのかを理解する必要性にも触れた。一例として、今回使用した貨物地域流動調査のデータは貨物の「総流動」を表すものであり、これに対して「純流動」の統計もあることを紹介し、この2つの違い、および目的に合わせてそれぞれ使用すべきであることを説明した。

最後に、数字をグラフなどに加工して見やすくする重要性、その逆に恣意的な加工もできる危険性にも言及し、統計とともに具体的な事象

にも目を向けることが必要であると講義した上で、学生に本日の授業内容のまとめと感想を記入させた。

自分の感覚と数値のギャップ、適合を楽しむ学生はそれなりに多かったが、数字を拾っていく作業には大きな差が見られた。物流や統計情報に関心を持つことができたとの感想が散見された一方で、遅々として手を動かさず関心を示さない学生に対し、どのように知的好奇心を惹起していくのか、今後の講義、ゼミにも共通する課題が本授業でも明らかとなった。入学後の早い時期に身に着けるべき学習姿勢を、どのように浸透させていくのか、今後の課題として位置付けられる。

#### ● 朴晟材 ロジスティクスを理解する

企業を取り巻く環境要件は、さらに戦略性が求められる方向へとダイナミックに変化しており、多くの企業では革新的なロジスティクスが企業戦略の一つとして組織的・体系的に展開されている。

本テーマ授業では、ロジスティクスの全体的枠組みを紹介した上で、身のまわりの関連活動を学生自身に発見させることで、ロジスティクスの理論的・実践的展開状況を学習するための視点を討論の中で確認した。

##### 内容

1. CSCMPにおけるロジスティクスの定義
2. ロジスティクスの高度化
3. 米国と日本のロジスティクスの発展史
4. ロジスティクス概念の生成と企業組織の変化
5. ロジスティクスの領域別区分
6. ロジスティクス活動のまとめ

#### ● 大川洋史 私にとっての「なぜ」

私の担当授業である「経営組織論」は、普遍的に存在する組織というものを客観的に検討する領域であるが、全ての社会科学、さらに言え

ば全ての学問領域が、日頃当然のものとして特別の関心を向けられないものに対して疑問を持って解明していく試みであるといえる。「アカデミックリテラシー」が大学教育に沿った基礎能力を指すとすれば、日常の生活をただ無為に流していくのではなく、その一部を特殊な認識対象として切り出して疑問を持つという姿勢は、基礎能力の根幹を成すものの一つといえよう。

そこで、授業においては、15分間の時間を与えて各自できる限り多くの疑問を列挙させる作業から入った。作業においては、疑問の質は問わず、どのような単純なものであろうと思いつくものを順不同で書くよう指示した。結果として、各クラスとも個数の分散は大きく、20個弱の疑問を提示できる学生もいれば、一つの疑問も提示できない学生もいた。ワークシートを回収し、学生が記載した疑問点を紹介しながらフィードバックを行い、日常において疑問の目を持つことの重要性を説いた。

全体的な結果の傾向として、疑問の個数が予想したよりも少ないのではないかと考えられた。高校までの学校教育で好奇心を発揮させる訓練よりも、事実や結果のみを暗記する訓練を優先して与えられたことが原因かもしれない。また、これまでの各学生の人生の中で心を動かすような経験、それを推奨する環境がなかったのかもしれない。いずれにせよ、大学入学時のアカデミックリテラシーの教育は必須であろうと感じられた。

### 3. 考察

アカデミックリテラシーは、各指導主任によるテーマ授業を行う点に特色がある。テーマ授業の共通の趣旨は、高等学校と大学との接続、特に学ぶための姿勢の違いについて、学生自身に考えてもらおうというものであった。学生には、さまざまな授業を通して、大学生活において必要なアカデミックリテラシーとは何かを考えていってもらいたいということが、我々アカ

デミックリテラシー担当の教員の願いである。

最後に、平成25年度の問題点について、平成26年度はどのように改善したか。またその効果はどうであったかという点について述べる。

①平成25年度の問題点としては、テーマ授業を先に行ったため、指導主任と学生とのつながりが希薄であった点があった。そこで、26年度は、テーマ授業の1番初めに指導主任の授業を置き、指導主任との関係をまず深めるようにした。指導主任の授業が初めに来るので、学生は指導主任が誰かを明確に把握したので効果的であった。

②平成25年度の問題点としては効果測定を行っていなかったという点があった。平成26年度は、基礎教育センターの方での効果測定は行ったが、アカデミックリテラシーという授業を通して、学生にどのような意識の変化があったか、またはなかったかをきちんと検証できていない。効果測定システムを、特に社会人基礎力との関

係から、考えていかなければならない。次年度以降の課題としたい。

③平成25年度、26年度に共通する問題として、学生の基礎学力の格差が大きいということが挙げられる。プレイスメントテストの導入によって、学生の基礎学力がどの程度かは明らかになった。その結果、プレイスメントテストの点数と、学生の理解力・学習態度・意欲・成績との間には、ある程度の相関があることが分かった。ただし、プレイスメントテストの点数が低かった学生は、単に基礎学力が不足している場合もあるが、学生相談室のカウンセリングの必要なケースも存在した。基礎教育センター・学生相談室との連携をさらに深めていく必要があるだろう。

以上、平成26年度のアカデミックリテラシーの概要とその問題点である。報告として記録に残すことによって、次年度以降に役立てていきたい。